

# 国境を越える同窓会

## —植民地体験と戦後の日中交流をめぐる歴史社会学的研究—

佐藤 量

立命館大学大学院先端総合学術研究科 博士課程  
(現 大阪市立大学都市研究プラザ GCOE 特別研究員)

### 緒 言

本研究では、日本統治下の中国において日本人学校に通った中国人のライフヒストリーに注目してきた。日本人学校に通った中国人は、「敵国」である日本の学校に通ったことにより、戦後中国社会においてさまざまな経験を強いられ、葛藤してきた。戦後中国社会において中国人同窓生は、日本人や日本といかに向き合い、また自分自身の体験をどのように位置づけながら生きてきたのか。長い時間の中で、複数の場が関係し、様々が絡まりあい、変化しまた持続していく様相を記録し考察した。

### 研究内容

中国人同窓生が戦後どのような体験を強いられてきたかはこれまで不明なままであった。そのためまず研究の範囲を、1945年～1950年代に照準し、戦後直後の中国人同窓生がどのような境遇であったか明らかにすることを目的とした。

### 研究方法

研究方法は(1)現地調査、(2)資料調査からなる。  
(1) 現地調査は、2009年5月22日～6月5日(15日間)、2009年9月14日～9月28日(15日間)に中国遼寧省大連市にて実施した。現地調査では中国人同窓生にインタビューを実施し、今回の調査では旅順工科大学の中国人同窓生を中心に聞き取り調査を実施した。聞き取り調査ではどの世代にインタビューをするかによって語りの内容が大きくことなるが、本研究では終戦直後を対象とするため、終戦直後にすでに成人であり、職業に就いていた人々を対象とし、大学出身者に照準した。

日本が大連地区に設置した旅順工科大学は、官立の工業専門大学であり、戦前当時に官立の工業大学は東京工業大学と旅順工科大学の2校であった。現在大連には、旅順工科大学の卒業生である中国人が20名ほど生活している。もっとも若い人が84歳で、最高齢者は96歳

である。今回の調査では延べ8人にインタビュー実施した。

(2) 資料調査では、中国人同窓生による手記、同窓会誌、日記、往復書簡、自費出版本などを収集した。多くの資料が個人所有であり、これまでに中国人同窓生および日本人同窓生の協力を得ながら継続的に資料収集を行ってきた。本研究では、旅順工科大学日本人同窓会誌『興亜技術同志会』(1913～1930)、『興亜』(1931～1943)、『旅順』(1966～2009)また、中国側の資料として『中国同学記念資料集』(旅順工科大学中国人同窓会編、2003)を閲覧・複写した。

### 調査結果

#### 1. 中国人同窓生をとりまく戦後処理問題

中国人同窓生の戦後生活は、「対日協力者」の処分問題と密接に関わっていた。「民族裏切り者」「親日派」を意味する「漢奸」の処分問題は、戦争や植民地支配の清算を意味するが、それだけでなく国民党と共産党による覇権争いや新中国の国家建設においても重要な意味を持っていた。

1945年以降、国民党と共産党の内戦状態が続いた中国では、政治的に不安定な時期が続くなかで、漢奸が「国民の共通の敵」として表出され、漢奸を処分することでナショナリズムを喚起し、大衆を扇動する効果をもたらした。1945年11月23日には国民党政府が「処理漢奸案件条例」を公布したことによって、1945年から1950年代にかけて中国全土で漢奸裁判や反漢奸闘争が展開し、40,000人以上の漢奸が処分された。

共産党は反漢奸闘争と土地所有問題を重ねて大衆工作を展開した。とりわけ旧満洲や関東州のあった中国東北地方では、共産党勢力の拡大と漢奸処分問題が密接であった。日本人が引揚げたことで広大な土地が残された中国東北地方では、これまでの苦しみの清算する反漢奸闘争が激化し、漢奸の土地を貧しい者に分配する運動が

展開した。この運動は東北地方各地の中共委員会が提起していた。

漢奸として処分された人々には、政治家、文化人、地域有力者などが多いがそれ以外でもたとえば、日本人の家を建てた大工が12年の刑を言い渡される例もあった。このように漢奸の定義はあいまいで、誰が漢奸として処分されるかわからない状況であった。このあいまいさが中国人同窓生を苦しめることになる。

## 2. 近代中国の工業化と中国人同窓生

戦後中国における漢奸の処分問題は、新中国の国民国家建設における権力闘争や社会再編と密接に関わっていたが、このような時代背景において、日本人学校を卒業した中国人の立場は極めて不安定であった。

ただし、多くの中国人同窓生は「対日協力者」のレッテルをはられ阻害されるものの、逮捕され処刑される事例はなかった。その理由として、インタビューに応じてくれた旅順工科大学中国人同窓生 A 氏は、「自分たちには工学の知識・技術と、日本人とのネットワークがあったから処刑されなかった」と語っている。中国人同窓生をめぐるポストコロニアル的状况は、漢奸として迫害を受けるのではなく、その技術や能力を国家に利用されることで生かされることであった。

1950年代の中国は近代化の一環として「工業化」に重点を置いていた。1949年10月1日に中華人民共和国成立して以降、1953年～1957年の第一次五カ年計画をはじめとして、工業化を中心に国家建設を進めていった。同時に、1950年代米ソ冷戦構造による中国の大陸封鎖にもなって、対外貿易が遮断され、対外政策が急務となっていた。

したがって、1950年代の中国において工業化を推進するための人材と、外国と関係の深い人材が注目されることになった。技術力を持ち、日本と関係の深い旅順工科大学の中国人同窓生が生かされたのはこうした理由による。

今回の現地調査においてインタビューに応じてくれたすべての中国人同窓生は、1950年代は国営企業で勤めていた。大連の機械製作会社に勤務していた中国人同窓生 B 氏は、1952年にはじまる日本との民間貿易において尽力し、同じ旅順工科大学の日本人同窓生と連携して、日中貿易活動を展開した。まだ日中の国交が回復していない時代に、日中の同窓生交流が経済交流の一端を担っていた。

しかし、国家によって生かされた状態の中国人同窓生

にとって、いつ漢奸として処分されるかわからない恐怖は常につきまとっていたという。中国人同窓生 A 氏は、「給料は良かったが、不安が消えることはなかった」「自分たち(中国人同窓生)はほかの中国人とは違う」と振りかえっていた。「ほかの中国人」とはつまり、戦前日本に迫害を受け、終戦とともに名誉を回復した一般的な中国人を指す。このように中国人同窓生は自分たちの立場を中国人でありながら中国人とは違う存在として認識していた。

実際、中国人同窓生を含む戦前日本と関係の深かった中国人は、このあとの時代である1960年代から1970年代にかけて文化大革命において、ほぼすべての中国人同窓生が迫害を受け、およそ10年におよぶ農村での勤労奉仕に従事させられることになる。中国人同窓生の抱いていた漢奸に対する不安は、文化大革命において現実のものとなった。文化大革命と中国人同窓生の関係については今後の研究課題としたい。

## 考 察

以上から、中国人同窓生の戦後生活は両義性を持っていたことがわかる。中国人同窓生は、対日協力者のレッテルを張られ漢奸として処分される恐怖におびえる一方で、日本人学校で学んだ技術力や戦前に由来する日本人との人間関係を活かすことで生き延びることができた。戦前の学校体験に由来する同窓会ネットワークが新中国の近代化に利用されながらも、それによって中国人同窓生が生き延びることができた。当事者たちはその両義的な立場に葛藤していた。本研究から、日本人学校に通ったことが中国人同窓生の戦後生活を規定し続けており、植民地体験は戦後も生き続けたことが明らかとなった。

## 謝 辞

本研究は財団法人三島海雲記念財団平成21年度学術研究奨励金によって遂行することができました。財団法人三島海雲記念財団のご支援を得ることで、中国人同窓生へのインタビュー調査を実施することができました。インタビューに協力してくださった当事者の方々とともに、末尾ながらここに記して心からの謝辞を表したいと思います。

## 文 献

- 1) 東英記『日中提携の歴史的系譜—マクロ的 分析』文芸社、2002年。
- 2) 坂部晶子『「満洲」経験の社会学』世界思想社、2008年。

- 3) 水内俊雄「植民地都市大連の都市形成」『人文地理』37(5), pp50-67, 1985年.
- 4) 羅平漢『中国対日政策と中日邦交正常化：1949-1972年中国対日政策研究』時事出版社, 2000年.
- 5) 李恩民『「日中平和友好条約」交渉の政治過程』御茶の水書房, 2005年.
- 6) 李恩民『中日民間経済外交(1945-1972)』人民出版社, 1997年.
- 7) 李玉等主編『中国的中日関係史研究』世界知識出版社, 2000年.
- 8) 劉傑『漢奸裁判』中公新書, 2000年.
- 9) 田桓主編『戦後中日関係史(1945-1995)-戦後中日関係史叢書』中国社会科学, 2002年.
- 10) 山路勝彦、田中雅一『植民主義と人類学』, 関西学院大学出版会, 2002年.
- 11) 山根幸夫・藤井昇三・中村義・太田勝洪編『近代日中関係史研究入門』研文出版, 1992年.